父の恋人、母の喉仏

40年前に別れたふたりを見送って

プロローグ

リビングに並んだ仏壇と祭壇

鎌倉から京都に越してきて、もうすぐ三年になる。住んでいるマンションは南向きのメゾネットタイプ。階下は暗いが、上階のリビングダイニングには陽が燦々と差す。

その光のさなか、上下は本棚として利用しているメタル製スティールラックの真ん中に、四十年以上も前に離婚した両親の仏壇と祭壇が隣り合わせで置いてある。

右が母の仏壇。もともと母本人から譲り受けていたもので、先祖代々の位牌や母の写真が並んでいる。左は父の祭壇。といっても小さな宗教画っぽい油絵の前に、喉仏の入った小さな骨壺と父の写真を飾っただけの簡素なものだ。

私は毎朝、双方にお水を供え、仏壇の蝋燭に火を灯し、二本の線香を焚く。そして、りんを鳴らし、「お母さん、おはよう。お父さん、おはよう。今日も仕事、頑張るね」とかなんとか言う。

人によっては、なかなかシュールな光景かもしれない。本人たちだって、死んだあとで娘の自宅のリビングに仲良く並ばされるとは、よもや思ってもいなかっただろう。

父は石川県金沢市に生まれた。母は静岡県下田市の生まれだ。

年齢差は五歳で、それぞれ建築設計士と舞台女優の卵として、二十代のときに東京で出会い、結婚して金沢に移り住み、三人の子をもうけた。私はそのうちの長女で、下に二歳下の妹、三歳下の弟がいる。

だが、私が小学四年生のときに、ふたりは離婚した。

母は三人の子を引き取り、新宿・歌舞伎町のクラブでホステスとして働いた。子どもを大学に行かせたい一心で、それはもう懸命に。だから私にとって「ホステス」は、尊敬こそすれ、疾しい職業ではなかった。なんなら二十歳になってすぐ、母の働いていたクラブでアルバイトを始めたくらいだ。賢くて、情に厚く、涙もろく、

私と違ってとっても真面目（シリアス）な人だった。映画と演劇と小説を愛し、後年は自ら文章を書き綴っていた。

父はというと、母と離婚後に数人の女性遍歴を経て、再婚、離婚、再婚と繰り返し、三番目の妻とは三十年続いたが、脳梗塞を患ったことが災いして晩年に離婚した。母への仕送りは、ほぼゼロに近い。仕事的には設計のセンスはあったものの、経営者の器ではなく、「借金と女をつくるのがことのほか上手」と娘に言わせてしまう残念な男だった。だが、いわゆる人たらしというか、女性だけでなく、同性にも親戚筋にも「仕方ないな」「手を貸してやるか」と思わせる何かがあった。私の楽観的で適当な性格は、嫌というほどこの父に似ている。

一般的には育ててくれたほうの親——つまり私の場合は「母」なわけだが、その親の介護や看取りにのみ関われば十分だろう。ところが、父が三度目の離婚をし、七十七歳にして独り身となったことで、私は父の見送りも手配する羽目になった。

弟と協力して、可能なかぎり頑張った「母の看取り」。

なんとかかき集めた情けから関与することとなった「父の見送り」。

そのふたつの行為をそれぞれなんとはなしに綴るうち、私は自分が思いのほか、

たくさんのことを記憶していることに気がついた。死にゆくふたりの中には、その数十倍の時間をかけて生きてきた、ひとりの女と男がしっかりと存在していた。

そのふたりは、子の贔屓目（ひいきめ）はあるにせよ、だいぶチャーミングだった。私はほかでもない彼女と彼から、人を愛すること、人を許すことを、いつの間にか学んでいた。

プロローグ　リビングに並んだ仏壇と祭壇　002

第一章　父と母とあの女（ひと）と　009
髪を洗ってくれた女（ひと）　010
シチューが流れて　022

第二章　父の金沢　027
夏の夜の夢　028
魅惑の味　033
だちゃかん　038
父の「MY LOVE」　043
一八〇センチと五メートル　047
葉書に書かれた文字　052
後ろを見ずに　055
肩車　063

第三章　母の歌舞伎町　069
母との交換日記　070
洋画劇場の高揚　075
涙のうどん　079
破られた約束　085
言わぬが花　091
クリスマスのストリップ　095
ロシアを愛す　100
最上級の男　105
母の「卒業」　108
パッチワークのある風景　113
みんな、誰かの母　118
六十代の恋　123
不束（ふつつか）な娘　126
森茉莉じゃなくても平気　130

第四章　祖母と母と私　135
ファミリー！　136
祖母の恋　139
祖母と母の〝予行演習〟　144
卵かけご飯の幸福　153

第五章　母を看取って　159
姉と弟の役割分担　160
一日五分の運動を　163
桜餅と花見　167
夢見たがり　170
「シップ」と「あっお」　173
カタキじゃないよ　175
完璧な退場　180
喉仏の行方　185

第六章　父を見送る　189
父のケアをした人　190
オンライン面会とFAX　195
「チョクソウがお　安いですけど」　198
歌うたいのバラッド　202
遺骨の落とし物　208
夜更けのサポート　213
段ボール一箱分の父娘（おやこ）　216
中一の女の子からの手紙　223

エピローグ　喪失感とは無縁の日々を　228

解説　石黒謙吾　232

おわりに　236

第一章　父と母とあの女（ひと）と

髪を洗ってくれた女(ひと)

幼いころ、私は父がすごく好きだった。ユニークで、ハンサムで、子どもにはやさしい人だった。建築設計事務所を経営していて、ときどきマンションや家などの建築模型に高さ二センチほどの小さな樹木をボンドで植える手伝いをさせられた。父と過ごせるその作業が、私はとっても好きだった。

ハンサムといえば覚えていることがある。

小学三年生のときに母が弟を連れて東京に行ってしまったあと（いわゆる別居だ）、私は妹とともに父の住む金沢に残った。ある日、学級参観に父が来た。親がひとり、またひとりと教室に入るたび、子どもは振り返る。そのほとんどが女親のなか、男親は否応なく目立つわけだが、父が入室した瞬間、教室がザワッとした。「え、あれ、誰のお父さんなん？」という浮き立った声が聞こえる。あきらかに私と同じ小学三年生の女子たちの目が

父に釘付け。なんなら周りのお母さんたちも釘付け。私は内心、鼻高々だった。

母からもこんな話を聞いた。

「姉貴（私の伯母）が五歳くらいのアンタを動物園に連れて行ってくれたんだけど、帰ってくるなり大笑いで、『カオちゃん、孔雀が羽をパァッと開くのを見て、あ、お父さんだ！って言ったんだよ』って」

孔雀の雄は、繁殖期になると雌にアピールするためにお尻に付いた色あざやかな飾り羽を広げる。まさに父だ。でも、幼いころの私はたぶん、羽を広げた美しい鳥と見た目が格好いい父を重ねていたのだろう。「大草原の小さな家」というアメリカのホームドラマがあったが、勤勉で愛妻家、ヴァイオリンまで弾ける父・チャールズのことも「お父さんにそっくり！」と本気で思っていた。

そんなわけで、父は女によくモテた。結婚は三回だが、浮気や不倫も数知れず。浮気や不倫は金と時間のある人の特権だと言われるが、金のない父はどうやっていたのだろう？

小学四年生の冬、東京にいた母が子育て破綻(はたん)を起こしていた父のもとから私と妹を正式に引き取ったのだが、その後も私たち三姉弟(きょうだい)は夏休みや冬休みごとに金沢の父に会いに行った。そして、そのたびに違う女性が父の隣にいた。毎回違うので、中学二年生のときに二番目の妻となる女性が現れるまでは、逆に気にならなかったくらいだ。

そんな父の恋人たちの中で、ひとりだけ、忘れ難い人がいる。
母が東京へ行ったあと、私と妹の面倒をみてくれたのは、父の母、つまり祖母だった。だが七十三歳の高齢とあって、しかも年金で孫の食事の世話をするのも、毎日私たちの家に通うのもしんどくなったようで、だんだんと来られなくなった。
そんな祖母と入れ替わりにやってきたのが、ユキ姉ちゃん（仮名）だ。
母と遠く離れ、母性に飢えていた私は、すぐにその女性に甘えた。なにしろまだ小学三年生、八歳だったのだ。
ユキ姉ちゃんは二十三歳だった。サンドロ・ボッティチェッリの描いたヴィーナスみたいに色白の少しふっくらとした体型で、やさしくて、綺麗だった。母とは違う匂いがして、母とは違う赤い口紅が若々しかった。子ども心に、ユキ姉ちゃんが本気で父を愛しているのがわかった。そして、私と妹を可愛がってくれるとき、それは点数稼ぎとかではなく、本心だということも。だからユキ姉ちゃんのことが本当に大好きだった。

忘れられないことが三つある。ひとつ目はお風呂だ。
ユキ姉ちゃんは「香織ちゃん、頭洗ってあげる」と言って、風呂椅子に座っている自ら

の腿の上に、向かい合わせに私をまたがらせた。そして私の背中に自らの左手を添え、まずは私の頭をあたたかなシャワーで濡らし、右手で髪を洗い出した。
目を開けると、ユキ姉ちゃんの立派な乳房が目の前にある。目を瞑ると、頭を洗うやさしい手の動きや、ぴたりと密着している太腿と太腿、手と背中などの感触にうっとりする。大事にされていることがじんじんと伝わってきた。

ふたつ目は、玄関で泣いたことだ。
私はＮＨＫ金沢児童合唱団に入っていて、クリスマスの定期演奏会か何かだったと思うが、石川厚生年金会館で発表会があった。担当はソプラノ。歌ったのは「プロローグ～星の絵本」「おとめ座」「こと座」「やぎ座」「オリオン座」「エピローグ～おやすみなさい」という六曲からなる合唱組曲「星の絵本」だった。
この組曲は歌詞がとても詩的で、たとえば「オリオン座」の冒頭は、「東の空の彼方 逞しい天の狩人オリオンに　今夜も追いかけられて　プレアデスの七人姉妹は　いつか白い鳩になり　大空を舞うよ」といった感じ。いまもほとんど空で歌える。
父はその夜は仕事だったようで、ユキ姉ちゃんと妹の佐知が見に来てくれた。終演後、エントランスでは歌い終えて身体から湯気まで立っていそうな子どもたちと、歌に感激し

た親たちが高揚感たっぷりで対面していた。私もふたりを見つけてホッとした。しかし、「着替え終わるまで待っとるし一緒に帰ろう」というユキ姉ちゃんを、子ども扱いしてほしくないという見栄なのか、たんなる照れなのか、「大丈夫。ひとりで帰れっし」と帰してしまったのだ。

着替えを終え、この日のために父が買ってくれたちょっとだけブカブカのエナメル靴で外に出ると、雪が降っていた。会館から大手町のマンションに向かうには、兼六園の東側の兼六坂を降りなければいけない。しかも雪がだんだんと勢いを増していく中、傘もなく、履き慣れないエナメル靴で歩いて帰るのだ。途中ですれ違った男性にも「大丈夫け？　おうちに帰るんか？」と声をかけられたが、「大丈夫です」と意地を張った。そして大人の足でも二十五分かかる距離を、五十分ほどかけて家にたどり着いた私は、ドアを開けるなり大声で泣いた。ユキ姉ちゃんがリビングからすっ飛んできたので、「なんで帰ってしもたんー！」と彼女を責めた。帰っていいと言ったのは自分なのに。

三つ目は、ベッドの中。

父はその夜もいなくて、佐知は隣で寝落ちしていて、私はユキ姉ちゃんに頭を撫でられながらまさに寝入るところだった。そのとき彼女が言った。

「ねえ、香織ちゃん。私、香織ちゃんとサッちゃんのお母さんになってもいいけ？」

眠気がすっとんだ私は、八歳の小さな小さな脳みそで考えた。――えっと、えっと、お母さんは東京のお母さんがお母さんで、でもユキ姉ちゃんは大好きで、そばにいてほしくて――。十秒くらい一生懸命考えて出てきた答えは、

「あのっ！　お手伝いさんやったらいいよ！」

正しい答えなんてわかるはずもなかった。

大学生になって、私は妻帯の人と恋に落ち、このころの父とユキ姉ちゃんのことをよく思い出すようになった。それで三年生の夏、金沢へ行くことになったとき、ふとユキ姉ちゃんに会ってみようと思い立った。あの雪の日に責めたことを、お手伝いさんだったらいいよと口走ったことを、謝りたかった。

そのころ父は東京のY設計に就職し、三番目の妻のヨウコさん（仮名）を金沢に残して単身赴任中だった。私は金沢駅前の電話ボックスから父の家に電話し、「ねえ、ユキ姉ちゃんの電話番号ってわかる？」と尋ねた。父は一瞬息を飲み、「会うがか？（会うのか）」と訊いた。

「うん、会いたい」

父は実家だったらわかると言って、番号を教えてくれた。
夕方、私はヨウコさんの家に向かった。二泊する予定だった。
電話を借り、ユキ姉ちゃんの実家にかけると、「もしもし」と若い女性の声がした。ユキ姉ちゃんだろうか？　私はドキドキしながら自分のフルネームを伝え、幼いころにユキコさんにお世話になり、いまは大学生なのですが、久しぶりに金沢に来たのでお会いしたくて連絡をした、というようなことを言った。その女性は「ユキコは最近結婚したんですよ」と、個人情報保護法などなかった呑気（のんき）な時代らしく、嫁ぎ先の電話番号を教えてくれた。
次にその番号にかけると、今度は男性が出た。焦った。まさかユキ姉ちゃんの夫が電話に出るとは。私は息を吸い、学生らしいハキハキした感じを醸（かも）し出しながらさきほどと同じ説明をし、実家にこの番号を教わったと言った。「ユキコは外出中です。こちらから電話させますので、番号を教えてください」と少し不審がった声が返ってきた。私はヨウコさんちの番号を告げた。
夜になって電話が鳴った。ヨウコさんから受話器を受け取り、「香織です」と言うと、「わあ、ホントに香織ちゃんなん？　ありがとう、思い出してくれてんね」というやさしげな声がした。その声の響きから、喜んでくれているのがわかった。続けて、「私も香織ちゃんに会いたかってんよ」と言われ、翌日の夜八時に、香林坊（こうりんぼう）の角にある大和（だいわ）という百貨店前で待ち合わせることになった。

当日の夜、大和の入り口前に立っていると、小走りに駆け寄る女性がいた。体型はヴィーナスのままだったが、薄化粧なので顔の印象はぜんぜん違っていた。すれ違っても絶対にわからないだろう。ユキ姉ちゃんはとまどっているような嬉しいような、なんとも複雑な表情を浮かべ、「わあ、香織ちゃん、おっきなったねえ」と涙ぐんだ。
私は父に教わった「ＹＯＲＫ」というジャズバーに、ユキ姉ちゃんを案内した。
ここは一九六九年に開店した金沢の中でも歴史あるジャズバーで、大和の横のビルの二階にあった（現在は移転）。薄暗い店内の奥、カウンターの正面には年季の入った三〇〇〇枚ほどのレコードが並んでいる。圧巻だ。ターンテーブルの上ではレコードが回っていて、ＪＢＬのスピーカーからジャズが流れていた。私とユキ姉ちゃんはカウンターに座り、それぞれに酒を頼んだ。
私は大学三年生、二十一歳で、ユキ姉ちゃんは三十五歳になっていた。結婚はお見合いで、ごく最近だという。
父は、母と正式に離婚したあとにユキ姉ちゃんと結婚し、私と妹と四人で暮らすつもり

だった。だが、父曰く、ユキ姉ちゃんの父親がそれを許さなかった。「娘と結婚したいがんなら、子どもふたりの籍は抜いて、実の母親のもとで育ててもらってください」と言われたそうだ。当然だろう。大事に育てたひとり娘が、妻帯で子持ちの十四歳も上の男性と不倫関係に。本音は「娘と即刻別れてくれ」だったに違いない。

だが、そうこうするうち、私と妹は母に引き取られ、籍も移動した。それなのに、父とユキ姉ちゃんは別れた。理由は知らない。でも三十五歳まで独身だったのには、父とのことが関係しているのだろう。良家の娘が、社会勉強の一環で働いた会社で妻帯者と恋仲になったのだ。それがどれだけ本気の恋であろうが、世間の常識では不倫だし、その後に別れたとしても、金沢のような狭い土地でその「過去の汚点」が彼女の結婚を阻(はば)んだであろうことは想像に難くない。〝汚点〟の娘として、本当に申し訳ない気持ちだった。

出された酒を目の前に口火を切ったのはユキ姉ちゃんだった。

「大人になった香織ちゃんから連絡が来て、会いたいって言われらんないかって、ずっと思とってん」

「なんで？」

「両親が離婚したのはあんたのせいやて、叱られらんないかって」

そんなことは思っていなかった。私の両親が別れたのはユキ姉ちゃんのせいじゃない。

彼らは彼ら自身の問題で行き詰まり、離婚を選んだ。

私は話を変えようと、自分自身の話をした。美術大学に進んだこと、妹も大学一年生になったこと、そして自らの妻帯者との恋のことなどを。結婚しているなら大丈夫かなと思い、父が再々婚したこと、いまは東京に単身赴任をしていることなども伝えた。ユキ姉ちゃんは、お見合い結婚のこと、夫のこと、子どもはいないことなどを話した。

そしてようやく本題に入ろうというところで、ユキ姉ちゃんが言った。

「香織ちゃん、私、香織ちゃんに謝りたいこと、あるげん」

「え、謝りたいのは私のほうです」

私はちょっとビックリしてそう言った。「謝りたいことがあって、ユキ姉ちゃんに会おうと思ったから」。

ユキ姉ちゃんはやさしく微笑んで、「ほんなら、先に私からね」と言った。

「覚えとるかな……厚生年金会館で香織ちゃんが歌ったあの日、先に帰ってしもてごめんね」

胸の底から何かが込み上げてきた。お互いにあの日のことをずっと覚えていて、お互いに謝りたいと思っていたのだ。ひと言でも喋(しゃべ)ったら何かがあふれそうだった。でも頑張って私も謝らないといけない。

「先に帰っていいって言ったのは私なのに、私のほうこそ、ユキ姉ちゃんを責めてごめんね」

涙が一筋流れた。ユキ姉ちゃんも真っ赤な目をしていた。そして「香織ちゃんが玄関でわんわん泣いて……そのあとどうしたか、覚えとる？」と訊いてきた。

「覚えてないです」

「ほっか。私がごめんね、ごめんねって香織ちゃんを抱きしめとったら、奥からサッちゃんが来て、三人で抱き合ってワーンッて泣いてんよ」

それは覚えていなかった。私が覚えているのは、マンションの玄関を開けて、明るくて、あったかい空気が流れてきて、自分はびしょ濡れで、足は靴擦れで痛くて、たぶん安心した反動で大声で泣いたことだけだ。でも、大声で泣いてもいい場所だった。あのとき、私と佐知とユキ姉ちゃんは、「家族」だった。

私はバーのマスターがそっと出してくれたティッシュペーパーを箱から抜き取り、涙を拭きながら、もうひとつ謝りたいことがあるんだ、と言った。「お手伝いさんだったらいいよ」と言ってしまったことを話すと、ユキ姉ちゃんは覚えてないと返事をした。

「覚えとらんのはね、たぶんそんとき香織ちゃんが何言いたいか、わかったからやよ。一緒におっていいよっていう意味ねんなって、私、きっとわかってんわ。ほやから傷つかんかったし、なんも覚えとらんがんないかな」

そうして、ユキ姉ちゃんは続けた。

「私ね、いまの夫のこと、とても大事に思っとれん。ほやけど、もし、『あと一週間の命です。最後に誰に会いたいですか』って言われたら、香織ちゃんのお父さんやわ」

ユキ姉ちゃんは二十三歳にして、本気で八歳の私と六歳の妹の母親になろうと決意していた。それほどまでに父を愛していることを、幼い私もわかっていた。とはいえ、十二年経ってもなお、ユキ姉ちゃんの口からそのような言葉が出てくるとは思ってもいなかった。私は正しい答えを探した。必死で。もう八歳ではないから、言えるはずだ。

「えっと、父はもう髪も真っ白だし、中年太りしてるし、ユキ姉ちゃんの知ってる格好いい男じゃないから、会ったらガッカリしちゃうよ。百年の恋も冷めるってやつだよ」

ユキ姉ちゃんはクスッと笑って、「ほおか」とだけ言った。

それから一度もユキ姉ちゃんには会っていない。連絡先を知らないから、父が当時の妻と離婚したことも、死んだことも伝えていない。

ユキ姉ちゃんのことを思い出すとき、私はいつもあの髪を洗ってくれた風呂場へと戻ってしまう。それは本当に官能的で、肉感的で、私はとても愛されていた。寂しくなかった。

シチューが流れて

ユキ姉ちゃんのことが大好きで、一緒にいたいと思っていた。

とはいえ、東京の母が「私のお母さん」であることに変わりはなかった。いつ逢えるのかな、いつ一緒にまた暮らせるんだろう、とずっと思っていた。

私は母が家を出る前日、手紙を書き、アルバムから剥がした自分たち姉弟の写真とともに、隙を見て母のボストンバッグの底のほうに差し込んだ。何を書いたかは覚えていないし、いま思えば子どもらしく「はい」と直接手渡してもいいようなものだが、そのときはそうとしかできなかったのだろう。泣いて引き止めるとか、そんなこともしなかった。覚悟のある相手に泣いてすがっても仕方ない、というのが小学三年生ながらにわかっていた。同時に、母が自分たちを絶対に見捨てないこともはっきりと理解していた。

そして、やはりというか当然というか、母は子育てに不向きな父から私と妹を〝奪還〟し、正式に離婚した。母はホステスとして新宿・歌舞伎町で懸命に働き、私たち三人の子どもを成人するまで育ててくれた。

父からの養育費は、ほぼなかった。中学生くらいまでは父から数ヵ月に一度、電話があり、子どもたちも順番に喋ったあと、切り際には必ず「今度、軍資金、送っからね！」と言われた。いつか母に「トータルでいくらくらいだった？」と尋ねたところ、母は「三十万くらい？」と皮肉な笑みを見せた。そんなわけで、私がこの世でいちばん嫌いな言葉は、「軍資金」だ。

大学生のころだったと思う。たまたま夜中まで起きていて、仕事から帰ってきた母と話をする機会があった。少し酔っていた母は饒舌で、父と暮らしていた最後のころの話をしてくれた。

母は三十一歳、父は三十六歳くらいだろうか。当時、父には恋人がいて（ユキ姉ちゃんのことだ）、家に帰って来ない日が続いていた。ある日の夕方、母が食事の支度をしていると、三日ぶりに父が帰ってきた。

「お帰りなさい」

「ただいま」

母は久しぶりに今日は食事でもするのかしら、と思ったらしい。だが、父はまっすぐベッドルームに入り、数枚の下着や服をボストンバッグに詰めてから、何も言わずに出て行った。母は途中までつくっていたシチューを、シンクにドバッと捨ててしまったという。

それは母から話として聞いただけで、私は実際には見ていない。でも、私には母がキッチンでシチューを流すのが見える。金沢の、大手町の、ＮＨＫの近くの、父の設計した、三年しか経っていない新築マンションの、四〇二号室の、３ＬＤＫの、Ｉ型キッチンの、三つのダウンライトに照らされた若き母が、両手に大きな鍋を持ってシンクにシチューを流した姿が。

実際に見たんじゃないかと思えるほど、脳内で再現されてしまったこの映像は、その後もずっと心に残っていた。

しかし、数年経ってからその話を母にしたら、母はまったく覚えていなかった。私にその話をしたことを、ではなく、シチューを流したこと自体を。私はとても驚いてしまった。

いま思うと、母は私に話すことで、その当時の気持ちや想いを、心の奥底にしまい込むことができたのではないだろうか。人は誰かが自分の心情に強い理解を示したり、深く共感してくれたりすると、その想いを、土に埋めるように、水に流すように、静かに瞑（ねむ）らせることができるのかもしれない。

これには後日談がある。

私がこの話をブログにまるっと書いたところ、それを読んだ母が電話してきたのだ。

「思い出した、そんなことあったの。でも、申し訳ないけど、シチューじゃなかった。カレーだった」

いや、カレーじゃ絵にならんやん！　と私は笑ってしまった。母も笑っていた。それは、オレンジ色の人参とか緑色のブロッコリーとか、クリーム色のジャガイモが入っている「白いシチュー」じゃなきゃいけないのだ。黄土色のカレーじゃダメなのだ。

そんなわけで、私の脳裏に刻まれている映像は、白いシチューのまんまである。

第二章　父の金沢

夏の夜の夢

あれは小学三年生の春ぐらいだろうか。

ある朝、ものすごい音と声がして目が覚めると、ダブルベッドの上で、父が母に馬乗りになって「なんで、んなもん、なくせんて！」と怒鳴りつけ、母が泣き喚いていた。私は同じ部屋の二段ベッドの上段に寝ていて、上から見たその絵面は、さすがにちょっと忘れられない。それまで父と母は仲がいいと思っていたから、そのときは言葉を知らなかったけれど、まさに「青天の霹靂」だった。

のちに母に聞いた話によれば、母はこのころ金沢の片町という繁華街にできたばかりのエルビルの「CAT」というスナックでママをしていて、客のひとりと営業終わりに深夜映画に出かけ、さらに酒場で飲み、酔っ払って朝に帰宅したら財布がなく、それを父が咎めたのだという。でも、母が子どもを家に置いてスナックで働いていたのは、父が生活費を入れなかったせいだろうし、母だってたまには息抜きがしたかっただろう。父に母を怒

鳴る権利はまったくない。むしろ私が父をどやしつけたいくらいだ。

それまで父と母は、子どもの前では仲がよい振りをしていたのか、この朝を機に隠す必要がなくなったとばかりに、ふたりの会話はなくなった。私たち姉弟はよく「きょうだい会議」を開いた。テーマは「どうやったらお母さんとお父さんが仲良くなるのか」。でも、小三の私、小一の妹、保育園児の弟で解決法が見つかるわけもなかった。

母は離婚を考え、「養育費も何も要らないから、子どもだけは私に託して」と父にお願いしたのだが、父は子どもを手放したくはなかったらしく、母の願いを断固拒否。数回の話し合いの末、「上のふたりは小学生ねんし、転校させらんは可哀想やぞ」という父の言葉で、母はまず、弟だけを連れて東京に行くことにした。

その日は秋の遠足の日で、私は母のつくったお弁当と母が選んだお菓子を持って、金沢市内を一望する卯辰山へと出かけた。遠足の記憶はまったくないが、「玄関を開けてもお母さんはいないんだな」と、涙をこらえて家まで帰ったことだけは覚えている。実際に玄関を開けて「おかえり」と言ってくれたのは、父方の祖母と妹だった。

小学四年生の冬休み、私と妹は東京の母の家へと遊びに行った。

その冬はのちに「昭和五十六年豪雪」と名付けられたくらいの大雪で、金沢も一メート

ル二十五センチの積雪を記録。当然、鉄道は運休し、これをチャンスと思った母は父に電話をかけ、「このまま香織と佐知を引き取りますね」と伝えた。子育てに対して経済的にも精神的にも破綻していた父はそれを了承し、のちに正式に離婚した。父の性格を知り抜き、戦略を練りに練った母の圧勝だ。

離婚した夫婦の中には、相手に子どもを会わせない親もいると聞くが、母は夏休みと冬休みには私たち姉弟を金沢へと送り出した。電車賃は東京〜金沢間を母が払い、金沢〜東京間を父が払っていた。始発駅の上野駅のホームで、特急「白山」や「能登」に乗り込む私たちを母が見送り、終着駅の金沢駅に到着すると父が待っている、という塩梅だ。

小学生以下の子ども三人なので、車内の周囲の大人が「えらいねえ」と褒めてくれたり、飴やお菓子をくれたり、隣の席のお姉さんと一緒に座席を向かい合わせにして四人でトランプをしたりした。この八時間弱の子どもだけの旅は、緊張感の中にちょっと得意げな気持ちもあり、また一期一会の大人との触れ合いもあって、とても楽しかった。

父は、夏休み、冬休みと、毎回違うお姉さんと一緒だった。彼女たちは最初の二、三日だけ、私たち子どもとも仲良く遊んでくれたり、ご飯をつくってくれたりした。

しかし、事態は変わる。

中学二年生の夏休みのことだ。小六の妹とふたりで東京から金沢に行き、父の家に着いたら、女性がいた。父が「ミワコさんや」と紹介してくれた。私はいつもの遊んでくれるお姉さんだと思って、「こんにちは。長女の香織です。こちらは妹の佐知です。よろしくお願いします」と挨拶した。

しかし数分後、父の新しい家を文字どおり家探しした妹がやってきて、こう言った。

「姉ちゃん。さっきの女の人、お父さんの奥さんだよ」

「え……。そんなことあるわけないじゃん。彼女でしょ」

「ううん、絶対に奥さん。だって箪笥に女の人の服、たくさんあるし、本棚に妊娠と出産の本もあった」

私は妹に案内されるままそれらを確認し、愕然とした。そして父のところへ行って恐る恐る「ねえ、ミワコさんって、お父さんの奥さんなの？」と尋ねると、父はバツの悪そうな顔をし、「ほおねんて（そうなんだよね）」とまるで他人事みたいに答えた。

私はマンションの屋上にひとりで上がって泣いた。この時点ではいつか両親がもう一度一緒になり、家族五人で暮らす未来もあるんじゃないかと夢想していたのかもしれない。父の再婚は、そういう未来がないことを如実に物語っていた。

一時間ほど泣いて、涙は枯れた。本当に一滴も出てこなかった。見上げた空には、星が

いくつかまたたいていた。そうして私は本当に、自然に、「親の人生は親個別の人生であり、それを子どもがどうこうしてほしいと言う権利はない。そして、子どもの人生も親がどうこう言う権利はない」という想いにたどり着いた。階下に戻り、私は父に言った。

「お父さん、結婚おめでとう」

一ヵ月の滞在が終わり、金沢を出た夜行列車「能登」が早朝、上野駅に着くと、母がホームで待っていた。

家に向かう電車に並んで座り、「どうだった？」と尋ねる母に、「お父さん、結婚してたよ」と私は言った。母は「ええ⁉」と驚いた。父が結婚したのは数ヵ月も前のことなのに、しかも実の子がふたり会いに行くというのに、母は事前に何も知らされていなかったのだ。私は二の句が告げなくなった母の顔を見て、「お母さんも好きな人がいたら、結婚していいよ」と言った。皮肉ではなく、心から。

あの夏、私は十歳くらい年を取った。

魅惑の味

私は現在の家が「生まれてから二十六軒目」なのだが、引っ越し好きの血は父から受け継いだようだ。生まれてから東京に行くまではたったの九年なのだが、その間に父は金沢市内で横山町、彦三町、石引、大手町と、四ヵ所も移り住んでいる。

自分が覚えているのは石引の家からで、住んだのは小学校に上がる前の二、三年だろうか。鉄筋コンクリートの平屋で、ものすごく小さいけれど坪庭があった。母は後年「カビがひどくて、早く引っ越したかった」と言っていた。

家族とのほとんど唯一の記憶は、父が風呂に入る前に青江三奈の「伊勢佐木町ブルース」の冒頭、「♪チャラッチャ、チャララッチャラッ、ッアァ〜、ッアァ〜」を歌いながら、脱いだ服を一枚一枚脱衣所から廊下に放り投げたり、変顔だけ見せたりするシーンだ。廊下にいた私と妹はゲラゲラ笑い転げていた。

次の大手町の新築マンションは、建築設計士だった父による設計で、八階建て、全十四戸、どの部屋も3LDK。引っ越したのは私が小学一年生に上がるタイミングで、そのとき父は三十四歳、母は二十九歳、妹は四歳、弟は二歳だった。

部屋は四階で、玄関を入って左に洗面、トイレ、バスルーム。あまり日の入らない右の

部屋には、母の化粧台と、ビブラフォンという鉄琴と大きな舟形木琴が置いてあった。正面の扉の向こうはキッチンと十五畳ほどのリビングで、中央に木製の八角形テーブルと背が高くて硬い椅子が六脚、壁には大型の家具調ステレオが鎮座していた。残る二室のうち一室は寝室で、両親はダブルベッドに寝て、二段ベッドの上段に私、下段に妹と弟のふたりが一緒に寝ていた。もう一室は私が弾くピアノと妹が弾くエレクトーンが並び、勉強机が一台。サンルームではラッキーとエミリーという名前のハムスターを飼っていた。

同じマンションの八階には「スペース建築研究所」という名の、父が所長兼代表取締役を務める建築設計事務所もあった。傍目には前途洋々、幸せで若々しい家族に見えたことだろう。

そんな初期の移動多き人生において、強烈な思い出の場所というのがふたつある。石引の「千加羅」という焼肉店と、彦三町の「福わ家」という饂飩屋だ。家族揃って外食をするのは、この二店だけだった。一年に一、二回ずつとか、そんな回数だったから、本当に特別だった。

「千加羅」は高級焼肉ではなく庶民的な店で、店内は煙がもくもくと立ち、いつも満席で活気があった。座敷席が父のお気に入りで、テーブルの中央に卓上ロースターがあって、

ひっきりなしに五人の箸が伸びた。

父と母がよく頼んでいたのは「シロ」と呼ばれる豚の大腸だ。脂身がなくて固いけれど、噛めば噛むほど甘みが口の中にじゅわっと広がる。子どもや年寄りには不向きで、「よお噛んでから飲み込むげんぞ」と父が言っていた。甘いタレもご飯とよく合った。まだ四歳くらいだった弟がペロリと平らげ、「白ご飯、おかわり！」と元気な声で言って、店のおばさんに「ご飯はもともと白い！」と笑われたのを覚えている。

「福わ家」は一階が駐車場で、同じ敷地内には「鬼は外」という蕎麦屋があった（現在は閉店）。大きな石造りの階段をのぼり、重厚な日本家屋といった風情の引き戸を開けると、暖簾の奥には座敷席が。テーブル席や個室もあるのだが、父はここでも座敷席に陣取った。饂飩は「一式」という、抹茶、菓子、饂飩鍋（二玉分）、おじや、香の物のコースで提供される。たいがいは、父の好きな和牛肉ののった饂飩鍋一式と、母の好きなニシンののったうどん鍋一式が注文された。ふたつで饂飩四玉分になるから、両親と子ども三人には十分な量だった。

テーブルにセットされた箸袋には、金沢弁で「あんた、ようおいでたね。今お抹茶いただいとって、ちょっこし待っとってたいま。」というような、饂飩を待つ心得が書いてある。父が行くたびに「これ、うちの兄貴がつくった箸袋ねんぞ」と自慢げに言っていた。「つ

くった」というのは、金沢弁の監修と箸袋のデザインのことらしい。伯父は金沢美術工芸大学の出身で、そのころは美大入学専門予備校「堀アート・デザイン研究所」の代表をしていた。

そうこうしているうち、抹茶と一緒に蜜菓子が出される。レンコン、人参、大根、ふき、ゴボウ、かぼちゃなどが砂糖でコーティングされたその菓子は、子どもにとってまさに〝ハレの日〟の特別な味だった。ただ、「一式」は二セットしか頼まないから、蜜菓子もふたつしか出ない。私たち姉弟はそのふたつを、ひと齧りごとに分け合った。

食べ終わるころにはテーブルにセットされた七輪にふたつの餡飩鍋がのせられた。火をつけると、木蓋がのった鉄鍋がぐつぐつと煮えてくる。弱火にしてじっと待ち続け、母が「もういいよね」といって木蓋を取ると、湯気とともにいい匂いが広がって……。それを待つあいだも楽しいものだった。

だが、このニシンの餡飩鍋が、子どもたちは好きではなかった。まさに〝大人の味〟なのだ。ときどき天ぷらののった餡飩鍋をオーダーしてくれて、子ども心にいつもこっちを頼んでくれたらいいのにと思っていたのだけど、我が家の母は絶対的存在で、とても言えなかった。思えば、子どもにまったく忖度しない人だった。そこが真っ正直で、ユニークな由縁だ。

最後はおじや。お櫃に入れられたご飯が出てくるので、残しておいたおつゆに投入し、溶き卵を入れたら完成する。母はいつも「このおじやが美味しいのに、五人だと足りない」とボヤいていて、たった一回だけだったが、家からこっそりご飯を持参したことがあった。でも、おつゆはふたつの鍋の分しかないわけで、ご飯の量が多すぎて、逆に美味しくなかったのではないかと思う。

焼肉「千加羅」は、いまはもうない。同じ場所に違う焼肉店があるそうだ。

「福わ家」はいまもある。こちらは大学生以降、友人や恋人を連れて何度となく行ったし、いまも金沢に行くときはまずここでランチをすることにしている。そして行くたびに、一緒にいる相手に箸袋の話をする。内心、「父とやっとること一緒や」とツッコミを入れつつ。

ただ、子どものときに妹と弟と齧り分け合った蜜菓子の、あの〝魅惑の味〟だけは、大人になってからは一度も味わえていない。あの特別さは、きっと家族の記憶とともに凍結されてしまったのだろう。

だちゃかん

金沢弁には「だちゃかん」「だっちゃかん」といって、あらゆる事象、物、人、状況などについて「駄目」とか「いけない」を意味する言葉があるが、まさに父は「だちゃかん」だった。

父は男、男、男、女の順の、四人兄妹（きょうだい）の三番目だ。真面目で堅実に育った親想いの兄ふたりとはぜんぜん毛色の違う男で、高校生でバイクを乗り回し、クレー射撃を得意とし、頭はいいが勉強はせず、実家でもまさに我が物顔でのさばっていたという。

私が「父、やばい」と思ったエピソードは母に聞いたもので、高校生だった父は長兄の妻（私の伯母）になんと毎朝、靴下を履かせてもらっていたらしい。殿様か。いや、バカ殿か。

ほかにもある。

これも母から聞いた話だ。母は二十代の初めに新宿三丁目にあった「伊都（いと）」という小料理屋でアルバイトをしていて、その店で父と知り合った。父は桑沢デザイン研究所のスペースデザイン専攻を卒業し、二級建築士として、一級建築士のIさんのもとで働いていた。母は、常連のIさんとその連れの父との両方に口説かれ、間違ったほうを選択したわけだ。

そのIさんの口癖が「一級建築士の免許なんて、実際の建築設計には関係ないよ」だったのだが、この台詞（せりふ）はなんと父も言っていたらしい。母はいつも「一級建築士免許を持つ人が言うのと、二級しか持ってない人が言うのとでは、意味合いが天と地ほど違う！」と笑っていた。

まだある。

父は母と離婚したあと、いつなのか正確には知らないが、自身が所長をしていた「スペース建築研究所」を廃業した。どれだけ建築設計のセンスがあっても、経営者としては無能だったらしく（第一、社会勉強に来たアルバイト女性と恋仲になる男だ）、自宅の家具や調度品はすべて差し押さえとなり、赤紙が貼られた。

そんなこととは露（つゆ）知らず、私は東京で暮らす家に金沢からピアノが届くのを、ずっと待っていた。黒いヤマハのアップライトピアノで、母の姉、つまり伯母が買ってくれたものだ。五歳からピアノを習っていて、東京でも続けようと思い、父から電話がかかるたびに「ピアノはまだ？」と訊いていた。

ある日、母が言った。
「政靖（父の名で、母はいつも呼び捨てだった）から電話があって、明日、ピアノが到着するって」
私はもう中学一年生になっていた。東京の母と暮らし始めたのは小学四年生の正月明けだから、二年以上が経つ。でも、そんなことはどうでもいい。ピアノが来る！　ピアノが来る！　翌日は雨だったが、私は中学校から急いで走って帰ってきた。
そして家に駆け込み、奥の六畳間に据えられたピアノを見て、驚愕した。ピアノは茶色だった。ヤマハの黒いピアノではない。母が「なんか、差し押さえで持ってかれたんだって。姉貴が買ってくれたのにね……」と言った。
私は踵を返し、雨の中を飛び出し、走って走って走った。母の前で泣きたくなかった。「お父さんのバカ！」という思いと、「伯母ちゃん、ごめん！」という思いと、「もうあのピアノは弾けないんだ」という悲しさでいっぱいだった。

しかもだ。そのもともとのヤマハのアップライトピアノにすら、父の「だちゃかん」が関与していたことを、私は後年、これまた母の話で知る。
母は私と妹が生まれ、ピアノを習わせようと思い、でも全額出せる余裕はとてもなかったので、ヤマハの営業担当者から勧められて積立を始めた。当時のヤマハのアップライトピアノの価格は約四十万円。毎月一万円ずつを納め、半分の二十万円くらいまで貯まったところで、担当者は、母ではなく父に連絡をし、こう言った。
「あと二年もお嬢さんたちを待たせるのはいかがでしょうか。なんとか残りは一括で払えませんか？」
見栄っ張りの父がなんと答えたかは知らぬが、父はその二十万円で、なんとビブラフォンを買ってしまったのだ。
ビブラフォンとは、金属製の音板をピアノの鍵盤と同じように配列した鍵盤打楽器、いわゆる鉄琴である。特にジャズなどで使用される楽器で、高さは大人の腰くらいあって、五歳の子が一般的に習うようなものではない。たぶんだが、二十万円を目一杯使って買える楽器を購入しただけのことなのだろう。
こつこつ積立を続けてきた母は打ちのめされ、伯母に泣いて愚痴った。独身の伯母は、株取引もやっていて貯蓄があり、「じゃあカオちゃんとサッちゃんのために」と、ヤマハのピアノを贈ってくれた。父の数十倍、男前だ。
そして件の茶色いピアノも、こちらは外国製だったが、父が次兄に金を借りて購入したものだったらしい。これを「だちゃかん」と言わずして、なんと言おうか。

ピアノは大学一年生まで続けた。高校時代は一瞬、音大に進もうかとも考えたが、ベートーヴェンの「月光」を習っていたとき、ピアノの先生から「堀さんの弾く月光は、日光みたいねえ」と言われ、素養がなさすぎると断念した。そのピアノはいま、大学の同級生の家にある。彼女の娘が小学生になったときに譲ったのだ。

父が亡くなって、遺品整理をした際、父宛の長兄からの手紙と次兄からの手紙が、それぞれ一通だけ遺(のこ)されていた。次兄の手紙には、こう書かれていた。

昨日オリエント・ファイナンス社より通知があり
（そちらへも知らせが行ったかもしれないが）
ピアノ分割代金の最終回が未納とのこと。
金額は１７９００円＋６１４円＝１８５１４円である。
銀行口座からの引きおとしは出来なくなったから、
営業所へ持参するか、書留で送れといっている。
至急、払いこみを済ませるように。
以上要件のみ。元気でがんばれよ。一度ＴＥＬせよ。

私は、中学一年生のあの雨の日に外に飛び出したときのことを久しぶりに思い出し、今度は父方の伯父に「ごめんなさい」と心から詫びた。

父の「ＭＹ ＬＯＶＥ」

そんな父ではあるが、「だちゃかん」だけだったら、よもや三回も結婚できまい。

要するに、駄目な奴ほど可愛いというか、どこか憎めないというか、そういう種類の男でもあった。お調子者で、やんちゃで、面白く、顔だけはいい。金はないが、色気はある。男気はないのに、ありそうに見える。だから「できた女」ほど寄ってくる。若き日の母然(しか)り、ユキ姉ちゃん然り、二番目の妻然り、三番目の妻然り。

母は父と出会ったころ、一級建築士のＩさん以外のひとりからも口説かれていたそうだ。父と結婚したことを「一生の不覚」と嘆く母に、そもそもなぜ付き合ってしまったのかを尋ねたら、「三人の中でいちばん無口に見えたから」と言った。新宿三丁目の小料理屋のカウンターでいつも黙って飲んでいた父。喋りすぎない男に知性を感じた母。しかし、付

き合い始めると父は本性を出し、調子のいいことばかりを言うお喋り男に変貌した。
母も母で当時はイケイケ。新潟大学の受験に失敗、故郷の静岡県下田市を出て兄の住む東京へと引っ越し、浪人生活を送るはずが、芝居にハマり、小さな劇団に所属して、昼は稽古、夜は小料理屋のアルバイトに明け暮れた。
ちなみに五歳も年上の父に煙草を教えたのは、母だ。「それまでミルクみたいないい匂いだったのに、煙草のせいでしなくなっちゃったんだよね」と言っていた。それ、娘に言うか？　あと、当時は陰毛を剃るのが若者たちのあいだで流行し、自分たちも互いの毛を風呂場で剃ったとも言っていた。それも娘に言うか？
でも、私はその話を母から聞いたとき、実は嫌な気持ちはまったくしなかった。エロスというよりは、一九六〇年代後半の東京カルチャーというか、その時代を生きた若者の面影を感じたからかもしれない。かたやしがない二級建築士、かたや舞台女優を夢見る（いまで言うところの）フリーター。そう、ふたりは私の父と私の母になる前、ひとりの男と女だったのだ。

そのふたりだが、いったんは別れたのだという。しかし、東京の家を引き払って金沢に帰ってきた父がアパートにいるとき、父曰く「ドアをコンコンってノックする音が聞こえ

た」そうで、ドアを開けたら母が立っていて、「できた」と言われたという。二十二歳の母のお腹に、私が宿っていた。父は母を家に入れ、「結婚するか」と言い、母は「うん」と答え、ふたりは近所の神社で祈祷だけしてもらい、籍を入れた。
そして一九七一年一月十八日、父は「スペース建築研究所」を創業し、二月二十七日に私が生まれた。会社と家族という、自身が舵を握る小さな船を大海原に漕ぎ出し始めたわけで、その時点ではやる気満々だったと信じたい。

私の名前は「香織」と書いて「カオル」と読むのだが、それは母が付けた。
最初は「高乃」という優美な名前にしたかったらしいが、堀という名字と画数的に運勢が悪く、次に谷崎潤一郎から一文字もらって「潤」にしようとしたが、これも画数がよくなかった（著名なジャーナリストが世に出てきたとき、実在するやん！　と思ったが）。「カオリ」ではなく「カオル」という読み方は姓名判断の本にちゃんと載っていた、と母が言っていた。
父は、娘の名付けには興味がなかったのか、母の決めた名前を受け入れただけか知らないが、いつしか私のことを「ケロちゃん」と呼ぶようになった。カオル→カエル→ケロケロという単純な変換だ。でもこの愛称に、子どもだった私は特別な愛着を感じていて、大学生になってからそう呼ばれても嬉しいほどだった。

ただ、父は我が子に対する愛情らしきものはそれなりにあるのだが、いかんせん家庭向きの男ではない。離婚前提の別居をしたのは私が小学三年生のときだが、それよりずっと前、私が一歳のときに、母は一度、私を連れて家出している。

母は東京に住む兄（私の伯父）を頼り、三カ月ものあいだ、何もせずぶらぶらと私とふたりで過ごした。そしてある日、伯父にこう言われた。

「雅和（母の名）、これからどうするんだ。香織、まだ一歳だぞ。ひとりで育てられるわけないだろ。三カ月経ったし、気が済んだよな。政靖さんのとこ、帰んなさい」

母は仕方なしに、父と住んでいた金沢のアパートに帰った。家に上がり、寝室に入ると、ベッドの頭側の壁に私の写真が一枚貼ってあり、父の字で「ＭＹ ＬＯＶＥ」と油性ペンで書かれていた。飴色に日焼けして、くるんと角の曲がったその写真を見て、母は父ともう一度やってみようかと思ったそうだ。

写真は、父か母のどちらかの手によって、アルバムにもう一度貼り直された。十代のどこかの時点で、私はその写真を見たことがある。飴色に焼けた、一歳の私の顔。父の愛嬌のある文字。残念ながら手元にはないが、いまもこの写真は私の脳裏にぼんやりと存在している。

一八〇センチと五メートル

中学二年生のときに父が再婚したミワコさんは、初婚で、貯金もあって、父の借金をきれいに返してくれた。そんな妻と、父は三年で離婚した。子どもはなかった。

金沢で、ミワコさんと父と一緒に時間を過ごしたのは、中学二年生と中学三年生の夏休みの二回だけだ。金沢から北にある海の町、内灘まで海水浴に行ったり、父が私と妹におそろいのカンカン帽を買ってくれたり、それを被って入院していた祖母を見舞いに行ったり、父と私だけで居酒屋に行ったりと、夏休み二回分の部分的な思い出はあるが、くっきりとした記憶はあまりない。

自分のことより、妹に関しての強烈な記憶がある。私が三年生のとき、妹は中学一年生で、ミワコさんは「もうブラジャー、要るがいね」と妹にブラジャーを買い、妹の腰まであったストレートの長い髪を「切ったほうが似合うがいね」と言って美容室に連れて行った。

上野駅に戻ってきた私たち姉妹を見て、迎えにきていた母は叫んだ。

「アンタ、何、その髪！」
しかも妹はブラジャーもしている。家に帰ったあと、母は妹のいないところで「ブラジャーは私が最初に買ってあげたかったのに！」と悔しそうに言った。なるほど、母親ってそういうものなのかあと、つくづく感心した。

父の三度目の結婚は、私が高校三年生のときだ。
電話で連絡を受けた私はそのときも「おめでとう」と言い、春休みに弟とふたりで金沢に行った。家には新しい妻のヨウコさんがおり、中学二年生の女の子と小学五年生の男の子もいた。ヨウコさんの連れ子だ。男の子は父のことを「お父さん」と呼んでいたけれど、女の子は「堀さん」と呼んでいた。
当然ながら、もう寂しいとか悲しいという感情はぜんぜんなかった。中二で「親の人生は親のもの。子どもの人生は子どものもの」というある種の悟りを得た私は、父は父らしく、楽しく元気に幸せに生きていったらいいと思っていたし、この新しい家族がうまくいくことを切に願っていた。そして実際にヨウコさんと父は、だいぶ長いあいだ、うまくいっていた。

しかし、慣れというのは恐ろしいものだ。私は父が好き勝手に生きるのも個性のひとつと捉え、そんな破天荒で自由な父を、魅力的だとすら思っていた。なんなら父が単身赴任で東京の代々木八幡に住んでいたとき、私はときどき泊まりに行って、ダブルベッドで一緒に寝ても平気だった。私も要するに、「できた女」のひとりとして、父をどこかで敬愛していたのである。
だが、そんな父のことを初めて軽蔑する日が来た。それは女性関係ではなく、私の就職について父が放った言葉だった。

私は大学卒業後に一年だけ芝居を学び、自分にはつくづく向いていないと悟って、好きだった雑誌『SWITCH』のアルバイト面接を受け、その編集部に潜り込んだ。
仕事は電話応対、お茶汲み、おつかい、コピー取り、本棚の整理など。私は雑用が意外に好きだ。最短ルートで効率よく、きれいに仕事が片付く方法を編み出すことに、エクスタシーすら感じる。それが「編集」という仕事に向いていると思ってくれたのか、四ヵ月経ったときに編集長から「編集に向いていると思うけど、やる？」と声をかけられ、翌月、正社員になった。
母にそのことをいちばんに伝えたあと、私は父にも電話で連絡した。父は「おお、よか

ったがいね。なんて雑誌や？」と言い、一週間後に代々木八幡の居酒屋で呑むことになった。

当日、店で向き合って乾杯した父は上機嫌だった。「ケロちゃんならすんごい編集さんになるわいや」「お母さんも喜んどったやろ。お母さん、本、好っきゃしな」と笑顔だった。私もご機嫌で杯を重ねた。

だが、酔いが回ってきた父の口調に、だんだんと本音が滲み始めた。そしてとうとう「アンタの務める会社の資産状況調べたら、借金だいぶあったぞ」と、のたもうた。

「は？　なんでそんなのわざわざ調べるの？　っていうか、そんなのお父さんにわかるわけないじゃん」

「そんなん、調べりゃわかれんて！」と父は怒鳴った。

「そんな、アンタが思うほどの会社じゃないわいや。あれやぞ、お父さんがいま勤めとるY設計は、借金なんかない、すごい会社ねんわ。創業者のYさんは東大卒で、社員は東大卒と早稲田卒しか普通は入れんげんけど、お父さんは設計の腕を認められて、中途採用されてんぞ」

私は、心底呆れた。娘が憧れの雑誌社の正社員になったというのに、その会社をくそ味噌にこき下ろしたあげく、おのれ自慢か。しかし、私のそんな怒りの滲んだ表情すら読み

取れず、父の言葉は止まらない。

「アンタは僕らが離婚したせいで、他の二十三歳の子らと比べたら、だいぶ大人や。ほやな、他の子らが一二〇センチくらいやとしたら、アンタはこんくらい、一八〇はある。ほんでも、お父さんはな、五メートルのとこにおれんぞ」

両手を突き出して一八〇センチと五メートルの差を表した父を見て、私はこの人と同じ血が流れている自分自身に、猛烈に腹が立った。軽蔑とは、失望とは、これほどまでに人をひんやりとした気持ちにさせるのか。母は、父と暮らしていたとき、これと同じような気持ちを何回味わったのだろうか——。

「私、帰るね」

テーブルに三千円を置いて、私は店を足早に出た。父への思慕が、そのときぷっつりと消え去った。

のちに母にこの一件を伝えたら、「あー、政靖らしいわ。アンタ、やっとわかったの？」と苦笑していた。「子どもっていうのは、いろいろギリギリまで信じていたいもんなんだよ」と私は返した。

葉書に書かれた文字

いつなのか正確には知らないが、父はY設計を退社して金沢に戻り、「工房自在」という自営の設計事務所を始めた。

ヨウコさんの連れ子のふたりも成長して家を出て、父とヨウコさんはふたり仲良く暮らしていた。しょっちゅう連絡を取っていたわけではないが、彼らが東京へ来たときに三人で会って食事をしたり、二十九歳のときには私が結婚を考えていた人を連れて金沢に行ったりした。

父は、自宅に人を呼ぶのが好きだった。

それは昔からで、一緒に住んでいたときも会社の部下を家に連れてきて、母が手料理を振る舞っていた記憶がある。母は「あるときから家に部下を連れて来なくなって、お花見とか社員旅行にも誘われなくなって。考えたら、そのころからユキちゃんと付き合ってたんだろうね」と言っていた。父、わかりやすすぎ。

わかりやすいといえば、母が父の不倫を確信したのは、エレベーターの中だったという。

そのころ、マンションの四階に私たち親子の住む自宅があり、八階に父の設計事務所があった。ある朝、母が一階で乗って扉を閉めようとした瞬間、ユキ姉ちゃんが飛び込んできた。母が「あら、ユキちゃん。久しぶり」と挨拶したところ、ユキちゃんはそれまでにない狼狽え方をした。それで「ああ、そうか」とわかったそうだ。母、恐るべし。

それはともかく、父は家に人を呼ぶのが好きだった。

父はY設計時代に「日本アルバニア協会」の理事となり、金沢に戻ってからもその活動を続けていた。バルカン半島の国、アルバニアにはヨウコさんとともに数回訪れ、アルバニア在住の役人が金沢のふたりの家に来て宴会をすることもあった。自民党所属の議員の後援会長も務め、支援者も含めてこれまた家で大宴会をしていた。

近所にも大勢の友人ができたようだし、ヨウコさんとの関係も変わらず仲良しで、父の人生の中でいちばん平穏で充実していたのは、きっとこのころなのではないかと思う。

二〇〇四年、私は三十三歳になっていて、結婚する予定だった相手とは別れ、電子出版事業を行う会社に勤めていた。秋に父から電話があった。「東京に用事あってえ、久しぶりに行くげんけど、会えんけ？」と言う。夕食だと酒のせいで良い再会にならないと思い、ランチをすることにした。

正午に飯田橋駅で待ち合わせたのだが、駅前で立って私を待っていた父の姿が小さくて、ちょっとショックを受けた。

「そんなに時間ないんだ。近くの和食屋さんでいい？」

私は早口に言い、父の返事も待たずに先に歩き出した。掘り炬燵席のある店で食事をしたあと、久しぶりの再会なのにこれでお別れなのはあまりに素っ気ないような気がして、喫茶店に入り直し珈琲を飲むことにした。

しかし、やはり私は甘かった。父はこれ幸いと、自分ちの近くの温泉宿の主人と見合いしないかとか、これから自民党の誰それ氏と会うけど紹介したい、などと言い出した。

私はイライラするのを抑えながら、「大丈夫。仕事もある。恋人もいる。この先どんなに困っても、自民党のその人に助けを求めにいくことは一生ないから、会わない」ときっぱり告げた。すると父は寂しげな表情を浮かべ、「ほうか、もうお父さんにできることはないがやね……」と言った。

私は「あなたがいままでお母さんと私たち子どもに何かしてくれたことがあったわけ？」と怒鳴って、テーブルをひっくり返してしまいたかった。でも、私にも分別があるのでそれはしなかった。代わりににこりと笑って、「うん。ない」とだけ言った。

父は懲りない。

数カ月後、父から電話があり、新しい住所を教えてほしいと言われた。私が何度目かの引っ越しをしていたので、出した葉書が戻ってきたのだという。

届いた葉書には、アルバニアで撮影された父とヨウコさんの写真が印刷され、白地の部分にこう書かれていた。

「血は水より濃いのです」

私はロットリングという特殊な製図ペンで紡ぐ、デザインされたかのような父の美しい字が、子どものころから本当に好きだった。変わらぬその字を見ながら、「お前が言うなよ」という憤りで震えた。

後ろを見ずに

私が元気溌剌な父と最後に会ったのは、二〇〇九年七月十一日のことだ。飯田橋でランチをしてから、五年が過ぎ去ろうとしていた。

実は父に会おうと思ったというよりは、久しぶりに金沢に行こうと思ったのだった。理由は三つある。ひとつ目は墓参り。ふたつ目は幼馴染が初めて子どもを産んだから。そし

て三つ目が父とヨウコさんに会うことだった。

墓参りには動機があった。数週間前に偶然乗ったタクシーで「僕、前職は占い師なんです」と言われ、名前と生年月日と解決したい悩みをひとつ言ってくれというので伝えると、こう言われたのだ。

「あなたの場合、仕事運の向上のためにはふたつ、やるべきことがあります。ひとつは、デスク周りの片付け。できれば、家じゅうの水回りの掃除も。もうひとつは、ご先祖様の墓参りです」

いま思えば、それは誰のどんな悩みも〝解決する〟もっともらしいアドバイスなだけだが、根が単純な私は翌日、家のデスク周りを片付け、トイレと洗面台と台所のシンクを磨き上げ、玄関も台所洗剤で泡立てて水拭きし始めた。すると携帯電話が威勢よくリンリンと鳴る。見知らぬ番号だったが、出てみると、なんと新規の出版社からの原稿依頼。それで「次は先祖の墓参りをせねば！」と考えたのだ。

もっと言うと、ずっとご無沙汰だった父方の祖母の墓参りがしたかった。

小学三年生のとき、母が弟を連れて家を出たあと、金沢に残された私と妹の世話をしてくれたのは、この祖母だ。

祖母は当時ひとりで彦三町の立派な家に住んでいたが、そこから徒歩二十分ほどの大手町にある私たちのマンションに日参し、食事、掃除、洗濯などの世話をしてくれた。もともと音楽教師をしていたので、ピアノや歌も教えてくれた。

強烈に印象に残っているのが、祖母が広告の裏紙に書いた、いまで言うところのＴＯＤＯリスト。ランドセルを所定の位置にしまったら〇、玄関の靴をそろえたら〇、食事のあとに食器を台所まで運んだら〇、など書き込む欄があって、ぜんぶ〇だと月末に五〇〇円のお小遣（づか）いをくれた（そして、このおかげで私は整理整頓がうまくなった）。それは年金から捻出していたわけで、父は本当に何もせず、祖母が孫の面倒を見るのは当然かのように、その行為にどっぷりと甘えていた。

高校二年生のとき、その祖母が亡くなり、私は母から電車代をもらって妹と金沢へ行った。身内で初めての葬式だった。父と、当時父と暮らしていた弟と合流し、四人で葬儀場に向かった。

そのとき、祖母の棺（ひつぎ）に集まって「きれいなお顔やねえ」「もう会えないんやねえ」と泣いている、祖母と同じくらいの年齢のおばあさんたちを見て、「そんなに泣くくらいなら、生きているうちにたくさん会えばよかったのに」となんだか腹が立ってきた。同時に、ずっと見舞いに行かなかった自分は泣く権利すらないとも感じていて、実際に涙ひとつ流さ

なかった。思春期真っ只中だったのだろう。
ほかに覚えていることといえば、骨だ。
火葬場で、祖母の焼かれた骨は銀のステンレス製の台車にのせられて出てきた。小さな身体だった祖母の骨は、やはりどの部分も小さかった。長い箸で遺骨を拾って骨壺に収める「骨上げ」を、父と弟がやったあと、見よう見まねで妹と初めてやった。
骨壺の蓋が係りの人によって閉められ、収まりきらない骨のかけらがいくつも台車上に散らばっていた。係りの人が小さな箒とちりとりを出す前に、父はさっとそのかけらをいくつか拾い、自分の分はポケットに入れ、私と妹にもひとつずつ渡そうとした。妹は受け取っていたけれど、私は「なくしちゃうから要らない」と断った。父はそのかけらも自分のポケットにしまった。「きっとなくすんだろうな」と、私はまた冷めた気持ちになった。
その当日だったか翌日だったか忘れてしまったが、金沢市の東端、小高い卯辰山山麓の中腹にある墓地に父と行ったのが、墓参りの最後だ。二十年ぶりとなる墓参りが、「仕事運向上」をきっかけに行うものと知ったら、祖父母は呆れてしまうだろうが、とにかく私は金沢へと向かった。

当時付き合っていた恋人と一緒に、父の家を訪ねると、玄関ドアを開けたヨウコさんが

「わー、いらっしゃい！」と笑顔で迎えてくれた。
金沢美術工芸大学で藍染めを教えているヨウコさんは、前回会ったときと変わらぬ自由な雰囲気で若々しかった。父は五年前に飯田橋で会ったときより体ががっしりしていて、健康そうだった。毎日一時間ほど山道を歩いているらしい。そう聞いて、ちょっと安心した。
久しぶりの娘との再会に、父はさすがに嬉しそうだった。私の隣にいる恋人らしき人の素性などは興味がないのかまったく聞かずに、「香織は面白いコでしょう」とだけ言って、あとは古いアルバムや以前に設計した建物の模型を見せながら自分の仕事の話ばかりしていた。
ちなみに香林坊交差点の角、一階から三階までミスタードーナツの店舗が占める、通称「ドーナツビル」は父の設計だ。私が小学生のころからあって、父はここを通るたびに「ここ、お父さんの設計ねんぞ」と言っていた。二〇〇三年に移転して開庁した石川県庁舎も父が関わっている。
ヨウコさんはお茶やお菓子を出したりして忙しく立ち働きながら、父の話す言葉を漏らさず聞いていた。そしてこう言った。
「香織、アンタのお父さん、面白いわー。ホント飽きない」

二十年も一緒にいて飽きないのか！　と私は正直、仰け反った。気を取り直し、「それはよかった。クーリングオフの期間はとうに過ぎてるから、もう返却できないよ」と冗談交じりに言うと、「返さんわいねー」と笑う。父もそばで満更でもない顔をしている。私は心から安堵し、このふたりはいつか同じ墓の中に入るんだろうなと思った。

小一時間後、四人で昼食のために近江町市場に向かった。

市場は、昔の地元民の場から、観光客のための場所へと変貌していた。その人混みの中を、父がすたすたと足早に歩いていく。ヨウコさんは「本当に振り返ってくれんがや。いつもああして先にどんどん行ってしまうげん。ほんで私がはぐれっと、怒れんよ」と笑った。

昼食後はタクシーに乗り込み、奥卯辰山墓地公園へ。管理事務所近くで、ふたつの桶に水を注ぐと、恋人がその桶を両方とも持ってくれた。私はお供えの花を、父とヨウコさんは「箱キリコ」と呼ばれる灯籠を持っていた。

小さいときにも見たはずなのだが、私はこの箱キリコのことをまったく覚えていなかった。これは金沢特有の風習らしく、四角い木枠に紙を貼った灯籠で、正面には「南無阿弥陀仏」と書かれており、側面には墓参する人物の名前を書き入れることになっている。

その日の午前中にふたりの家に着いたとき、私が「お墓参りに行きたい」と言うと、ヨウコさんはさっと出かけ、花と箱キリコふたつを手に戻ってきた。父が箱キリコのひとつに筆ペンで私の名を書き入れるのを見て、私は妹と弟の名前も書いてと頼んだ。父が私の名の横に、佐知、孝祐と書き添えた。

墓の敷地は意外に広く、五つの小さな墓石があった。父は敷地に張り渡されたビニール紐に箱キリコをくくり付け、墓を指し示しながら「これはアンタのお祖父ちゃんとお祖母ちゃん、これがアンタの曽祖父母、これが僕がちっちゃいときに亡くなった兄貴……」などと説明してくれた。

私は花をすべての花立てに分けて水を注ぎ、蝋燭を立てた。父が線香に火をつけた。そしてそれぞれ、ひとつひとつの墓の前にしゃがんで手を合わせた。

そんな私たちの様子を、恋人が何枚か写真を撮ってくれた。でも、墓の敷地内には一歩も足を踏み入れなかった。まるで僕は舞台に上がる役者ではないです、というように。

帰りはタクシーではなく、山道を歩いて降りた。降りた先は「ひがし茶屋街」。浅野川に沿うようにある茶屋街で、金沢への観光客は必ず行く場所だ。例に漏れず私と恋人も前日にその一帯をぶらぶらと歩き、数軒の店を冷やかしていた。

私はふと、これから訪ねる友人に出産祝いを買おうと思い立ち、「ちょっと買い物してくる」と三人に言い置いて、前日に訪ねた一軒の店へと駆け出した。品を選び、支払いをしているところに、父とヨウコさんと恋人が入ってきた。

店を出て、前方を歩く父たちの後ろ姿を目で追いながら歩いていると、隣にいた彼が「ヨウコさんがさ」と言った。

「さっき香織が駆け出していったとき、ああいう姿、お父さんそっくりって言ったんだよ」

私はその言葉に驚いてしまった。

そうか。そうなんだ。私も後ろを見ずに、すたすたと歩いてしまうんだ。でも、私が振り返らずに先を急いでしまうのは、一緒にいる相手のために、先に目的地を見つけておきたいからなんだよ。

そこまで考えて、私は父もそうなんだろうなと、このときわかった。私は父の子なんだ、まぎれもなく。

彼の手をぎゅっと握ると、彼が握り返してくれた。そして四人で私の友人の家へと向かった。

肩車

私の名字は「堀」で、石川県金沢市出身であり、織田信長や豊臣秀吉に仕えた「堀秀政」の子孫だという話だ。残されている堀秀政の肖像画は、顔が小さく、目が大きくて鼻筋が通っており、たしかに父や伯父たちに似ているなあと思う。

とはいえ、直系ではなく、分家の分家のそのまた……という位置付けらしい。私が小さいころ、父はよく「世が世なら、お前は姫やぞ！」などと言っていたが、母は「直系でもないくせに……」と鼻白（はなじろ）んでいた。卯辰山の中腹にある堀家の墓地には、本当に分骨が入っているのか疑わしいものだが、堀秀政の墓もあって、父は三男でありながらそこの墓守（はかもり）をすることに誇りを持っていた。

その父が、二〇一四年九月二十日に脳梗塞（のうこうそく）で倒れ、半身不随（はんしんふずい）となった。

父の妻、ヨウコさんは、頭が痛いと呻（うめ）く父を「病院に行こう」と説得したらしいのだが、「大丈夫やって！」と頑固な父が拒否したらしい。その結果、命に別条はなかったものの、

半身不随と言語障害を発症し、入院した。ヨウコさんから連絡をもらった私は「近々、見舞いに行きますね」と言って電話を切り、実際にそのつもりだったのだが、結局行ったのは翌年の八月。関西出張の帰りに金沢へと寄った。

父とヨウコさんに会うのは二〇〇九年の墓参り以来で、六年ぶりだった。以前の横山町の家から、小将町（こしょうまち）の家賃三万円ほどの古い家に引っ越していて、玄関を上がってすぐの部屋に置かれた介護ベッドに父が寝ていた。ヨウコさんが「お父さん、香織が来たよ」と声をかけると、「おおお」とだけ声を発し、泣き出した。

レンタル布団が敷かれた二階の一室に荷物を置いてから、私は階下に戻って父と話をした。後遺症である構音（こうおん）障害が激しかったが、言っていることはなんとかわかった。

父は、ヨウコさんが台所で食事の支度をしているあいだに、そこの本棚にある箱を持ってきてほしい、と私に頼んだ。建築関係の大型の書籍が並んだ棚の奥のほうに、箱らしきものがあった。ベッドまで持ってくると、父が「あええ（開けて）」と言う。手紙などに交じって、なんと父と母のフィジー旅行の写真が白い封筒に収められていた。初めて見るものだ。ふたりともとても若く、仲睦（なかむつ）まじい様子で、私はこんな時代もあったのかと驚いてしまった。

と同時に、この写真を、三番目の妻と結婚して二十年以上にもなるのに、こっそり捨てずに持っていることにも驚いた。父は私に「おっえっえ（持ってって）」と言った。

翌日、私は父の親戚を訪ねることにした。

父には兄がふたりいて、この伯父さんたちには、父がそれはそれは世話になった。私が知っているだけでも、長兄には「父と二番目の妻ミワコさんとの喧嘩の仲裁」、次兄には「ピアノ購入のための借金」という「借り」がある。最後に会ったのは私が高校二年生のときの祖母の葬式だったので、せめて挨拶と、父の容態の報告だけでもしようと考えたのだ。

父に連絡先を聞くと、「最近は連絡も取っていないし、ここに引っ越したばかりだから、住所録がすぐに出ない」と言う（もちろんはっきり喋れていないので、たぶんそういうことだろうと解読した）。

それで、ひとりで昼食をとった彦三町の饂飩屋「福わ家」を出たとき、たしか近くだったなと思って次兄の伯父さんの自宅を訪ねた。うろ覚えだったが、一発で記憶にある玄関が現れた。「ごめんください」と声をかけると、出かけようとしていた伯母さんがいた。見覚えのある顔だった。

「政靖の娘の香織です」と挨拶すると、伯母さんは「あら、香織ちゃんなん？　ほんでもごめんなさい、小さいころのイメージしかないんで、顔わからんわ」と言った。なんと伯

父さんも脳梗塞を発症して、いまは部屋で寝ており、従姉妹のムッちゃんは出かけているという。私はいまの父の様子や小将町に引っ越したことを伝え、自分の名刺を渡してから辞した。

次に、長兄の伯父さんの職場に電話をすることにした。

伯父さんは金沢美術工芸大学の出身で、美大入学専門予備校「堀アート・デザイン研究所」の創業者だ（現在は閉業）。伯父さん自身はすでに引退し、長男のマサアキ兄ちゃんが継いでいると聞いていたので、ネットで調べた電話番号にかけたら、マサアキ兄ちゃんが出てくれた。

一時間半後に本多町（ほんだまち）にある予備校に着いた。マサアキ兄ちゃんと会ったのはこれも祖母の葬式以来。まるで覚えていなかったが、やっぱり堀秀政の肖像画に通じる顔の小ささと、目の大きさで、しかも私より年上にはぜんぜん見えない、とても若々しい人だった。

一時間ほど互いの親の近況や仕事の話などをしたあと、私は父とヨウコさんの家に帰ることにした。予備校までの坂道が、上りも下りもかなりの勾配で歩くのがしんどかったので、「別の道を教えてください」とマサアキ兄ちゃんに言うと、父の家まで車で送ると申し出てくれた。

距離は車でほんの十分ほどだった。

「よかったら少し寄っていきませんか？　父、すごく喜ぶと思うので」

私がそう言うと、「はい、そのつもりでした」と車を近くの寺に停めて、一緒に降りてくれた。

マサアキ兄ちゃんを連れてきたよと玄関で大声で言うと、父の「おおお」という声がした。父はベッドから車椅子に移りたいと言って、ヨウコさんに手伝ってもらって、座った。

久しぶりに甥っ子と会えた喜びで、父のお喋りは止まらなかった。「アンタのお父さんはたっだ（とっても）才能あってんわ」と言っては泣き、「預かっとる先祖の位牌は、ゆくゆくはアンタに継いでもらいたいげん」と言っては泣いた。発音がままならないので、その言葉を完全に理解するのは難しい。でも、マサアキ兄ちゃんは諦めることなく、身体を前のめりにして聞いてくれた。

最後に父は、十五歳も上の兄が自分を肩車してくれて、しかも自分がお漏らししたのに怒らなかった、という話をした。そして「アンタのお父さんは本当にやさしい人ねんわ」と言って、また泣いた。

第三章　母の歌舞伎町

母との交換日記

小学四年生の三学期から、母と、小二の妹、年長の弟とまた一緒に暮らせることになった。

家は、東京・東村山市の西武多摩湖線・八坂（やさか）駅から徒歩八分の木造アパートだ。畳敷きの２Ｋで、トイレは和式。風呂は、敷地内に戸数分の十二個のプレハブ風呂が建っていて、弟はよく隣のイタズラ坊主に猫を放たれ、追いかけられて泣きながら風呂に駆け込んでいた。古いアパートではあったが、いちばん端の部屋だったので、陽がよく入った。

高卒の母は簿記を学んで事務仕事に就いたが、父からの養育費などはないも同然の生活の中、事務の給与で子ども三人を大学まで行かせるのには無理があった。母は新宿・歌舞伎町のクラブで働き始める。三十三歳だった。

十七時、四畳半の部屋のちゃぶ台で夕飯を四人そろって食べ、母は十八時に家を出て、十九時から二十三時まで働き、二十四時に帰宅する。子ども三人での留守番はすぐに慣れ、

テレビを見たり宿題をしたりして過ごし、ときには派手な姉弟喧嘩もやらかし（隣の部屋のおばさんによく叱られた）、風呂に仲良く入り、六畳間に布団を二組敷き、寝ながら母の帰りを待った。保育園に通っていた弟がいちばん上手に布団を敷くので、毎晩おだててその気にさせて、二組の布団を敷いてもらった。小学生だった私と妹は一日交代で茶碗を洗い、母の夜食用にと、残ったご飯でおむすびを握ったりした。

八坂時代は、あまりいい思い出がない。

私は転校した当時、自分が訛（なま）っていることがわからなかった。クラスメイトの男子と

「お前、すげー訛ってんな」

「……どこが訛っとらんや？」

「えー、わかんねーのかよ」

「わからんわいね。どこいね？」

といった会話を繰り広げたあとは喋るのが怖くなり、ひと言も話さなくなった。

ほどなく男子は揶揄（からか）うのをやめたし、言葉の問題は三ヵ月ほどでなくなった。しっかり東京弁をマスターしたからだ。

しかし、運動能力が低く、またひどく暗い雰囲気の私を、女子たちは煙たがった。小学

校にはそのころクラスにひとりは番長みたいな女子がいて（いまもいるのかもしれないが）、彼女の言うことは「絶対」。私は彼女にとことん嫌われ、体育の時間などは一緒に組む人もおらず、学校に行くのが本当に憂鬱（ゆううつ）だった。

小学五年生のとき、一度だけ、父がその八坂の家を訪ねて来ることになった。金沢から何か荷物を車で運んできてくれるらしい。

私は本当に父に会えるのが楽しみだった。週末で、母が夕飯を用意して、家族みんなで父の到着を待っていた。しかし、いつまで経っても父が来ない。ナビもない時代だったし、家が見つからなかったのだろう。

二十時を過ぎた。私はいてもたってもいられず、「ちょっと探してくる！」と言って、母が止めるのも聞かずに家を飛び出した。そして車の通る大通りまで出て、父の乗っている車を探した。探したといっても、車種がわかっていたわけではない。ただ、私が立っていたらお父さんが見つけてくれる、と思っていたのだ。

そうして交差点の信号を、青になるたびに渡りながら、走りゆく車の一台一台を見逃さないように睨（にら）めっこしていたら、父の乗った車がすっと目の前を通り過ぎた。横顔が判別できたのだ。でも父は私には気づかず、車はどんどん私たちの住む家とは違う方向へ走っていく。私は「おとーさーん、おとーさーん！」と大声を出し、半ば泣きながらその車を必死で追いかけたが、小学生の足でなくとも追いつくわけがなかった。

家に戻ってから、三十分後に父がようやく私たちの住む家を探し当ててやってきた。そしていくつかの荷物を運び込み、同乗者がいたのか、「急いで帰らないかんげん」と言って帰っていった。滞在時間は十五分くらいだった。

このときの、「久しぶりに会える！」という有頂天な気持ちからの、車に追いつけなかったときの「会えないかもしれない！」という絶望への落差は、いまでもありありと思い出すことができる。あの絶望感は小学五年生までの人生でいちばん大きく、その絶望直後だったのもあって、すぐに帰った父を悲しく思う心の隙間もなかった。

ただ、そのとき母が「ホントッ、あの人、子どもの気持ちぜんぜんわかってないっ！」ときりきり怒っていて、ああ、お母さんは私たちがあえて言葉にしないことや我慢していることを、ぜんぶわかってくれているんだなと少しだけ安心した。私たちは父が食べてくれなかった食事を囲み、黙々と食べた。

親しい友人ができないのは、中学校に上がってからも変わらなかった。

唯一、アパートの隣の部屋に住む同級生で違うクラスのジュンコちゃんがやさしくて、

放課後に彼女と一緒にお喋りできるのが何よりの慰めだった。でも、アパートの上階に住むひとつ年下の女子もジュンコちゃんのことを大好きで、半ば取り合いになっていた。

私はそのころ、とても不安定だった。夜、母がいない中での姉弟喧嘩は荒れに荒れ、取っ組み合って妹の髪を引っこ抜き、弟の肩にデザート用の小さいフォークを突き刺したこともある。母の前ではその不安定な感じを出さないようにしていたが、母親というのはよく見ているものだ。ある日、母が「交換日記しようか」と言ってきた。

私はその日から母と交換日記をした。とはいえ、あまり心配をかけるようなことは書かなかったし、交換日記というよりは、母が私の書いたものを読むだけのことだった気がする。

でも、「隣のジュンコちゃんと、もっと仲良くなりたい」と書いた翌日、西陽の差し込む四畳半の部屋で、制服を着たままの私が母の膝に頭を乗せ、私は声を出さずに泣いていて、その涙の滲みが出勤前の母のスカートに染みになって、でも泣くのをやめられなくて、母が私の頭を雑に撫でながら、「なんであの子が好きなのかねえ。たいした子じゃないわよ」と言ったことはやけにはっきりと覚えている。

母の慰め方は、いわゆる母親っぽくなくて、正直な人のそれだった。そして私はそれで気が済んだのか、交換日記はそれから一カ月と続かなかった。

洋画劇場の高揚

母は離婚の際、名字を戻さなかった。「堀」は父方の名字だ。高校生のころ不思議に思って母に「嫌いになった男の名字をなんでそのまま名乗ったの？」と尋ねたら、「だって土屋（つちや）って名字、田舎くさくて嫌いなんだもん。堀のほうが格好いいじゃない」と言うので笑った。「子どもの名字が変わってイジメられると可哀想だったから」とか言わないところが母らしい（余談だが、堀も土屋も、印鑑で押すとそっくりだ）。

大学生のときだったか、母に離婚の理由を尋ねてみたこともあった。家庭を顧みなかったこと、生活費を入れなかったこと、不倫、母に手をあげたこと。原因は枚挙（まいきょ）にいとまがない。

でも母の答えは、私が想像していたものとぜんぜん違っていた。母は「昼にテレビで洋画劇場、見るでしょ」と言った。

「すごーくいい映画で、ああ、この映画の話、誰かにしたい！　って。で、政靖が仕事から帰ってきて、食事中に話そうかなと思うんだけど、あ、この人に話してもぜんぜん通じないんだなあって……。それで別れるって決めた」